

川越市の農業は、自然的立地条件から、西北部台地及び南西部の台地畑作地帯と、北東から東部にひらけた水田地帯に大別される。畑作地帯では、ごぼう・にんじんなどの根菜類・露地のきゅうり・トマト・なすなどの果菜類、ほうれん草・キャベツを代表とする葉茎菜類などが栽培されている。が、適地適産が進んだ今日、長距離輸送のきかない葉茎菜類が、大都市近郊農業として増加している。水田地帯では、麦の裏作はあまり行なわれておらず、ビニールハウスによるトマト・キュウリ、その他の栽培が普及しはじめたが、まだ大半の農家は農閑期には、賃金労働者として働きに出ている。

新潟の地域性に関する考察

— 主に歴史地理的観点から —

坂井陽子

明治以降の新潟の発展は、いかなる要因に起因していたか。石油・天然ガスの利用とその生産を二大変革期とする工業化は言うに及ばない。しかし、いくら工場が立ち並んでも、工業原料の運搬、工業製品の配給組織が働かなければ、それらは成り立たない。特に新潟の場合、港湾や鉄道駅両方に近い信濃川右岸臨海地に工場群が集まった所以である。

ところで、物資の収集、中継、分散といった流通部門を受け持つのは、運輸業、卸売業、倉庫業等を中心とする商業であるが、これらは旧新潟の信濃川左岸よりの一帯や、右岸の工業地帯近辺に集まっている。つまり、工業地帯の近くでその便宜を図る機能や、西方に集中する中央商店街へ最終消費材の配給を行う機能、さらに入港貨物を積換え移卸や鉄道で他地へ仕向ける、あるいは逆に鉄道輸送貨物を輸移卸するという中継機能をなし易い場所に集まっている。そしてこの最後の中継機能こそは、近世の頃も、交通体系が変わった現在も、等しく新潟の商業に欠かせないものである。要するに、交通の要衝という新潟の持つ位置的特性は、その発生から今日に至るまで変わりが無い。

所で次に、上記の商業以外の商業、最終消費材を提供する小売業をはじめ、商業活動を間接的に補助する金融業、保険業等は、卸売業と隣接して、近世の頃の新潟市街地を中心に集まっているが、ここは、行政・文化機関の集中も見られ、CBD地域を形成している。つまり、このCBD地域は、歴史時代からの継続であり、これは真に、歴史的核 Historical Core と言うべきものであろう。既成市街地を示す DID 地区の広がりも、ここを中心としている。

日本の諸都市の場合、歴史的核はかつての城地周辺に見られる場合が多いが、それはとりもなおさず、日本の諸都市のうち、明治以後現代都市へと拡大をみた都市は、かつての城下町に圧倒的に多いということと関係があり、そうしたかつての城下町が近代都市へとスムーズに移行できたのは、中枢的管理機能、つまり行政の中心が、ひき続きそこに置かれていたということのみならず、城下町内に、町人町や職人町をもっていたことにより、経済都市の一面を有していたからだという。

新潟の場合を振り返ると、港町時代に、交通の中継地点という先天的な地理的条件と、多分に人為的な幕藩体制の保護のもとで、その崩壊過程に矛盾することなく、商業による経済都市的基盤が培われていたことが、第一にその後の発展の基礎にあった。明治以後の出発には、体制下の人為的要因の

継承として、行政機能の集中を新たに獲得することができた。

福島県会津高田町の農業

— 特に薬用人参について —

鈴木 勢津子

会津高田町は福島県大沼郡の東部に位置し、地形は全般的に山がちであるが、町の北東部には会津盆地の一部を成す宮川扇状地が広がっており、肥沃な水田地帯を形成している。このため、耕地の殆どは会津盆地上にあり、稲作中心の農業が行なわれている。ここでは肥沃な土壌や夏季の高温によって水稲の反当収量が多いが、多雪地帯であるため、裏作は殆ど行なわれず、水田単作農業の傾向が強い。

宮川扇状地の南西端に耕地をもつ永井野地区では傾斜地が多いため、水田率が比較的 low 低く、果樹、工芸作物類の栽培面積の比率が大きくなっている。永井野地区は会津高田町の中でも薬用人参の栽培が最も盛んな地域であるが、その中心地は会津みしらず柿の量産地でもあり、ここでは稲作と薬用人参及びみしらず柿栽培によって農業経営を行なっている農家が多い。

薬用人参は、栽培農家数や収穫面積が非常に少ないので、町全体の農業における地位が低く、農業生産の上で特に重要な作物であるとは言えず、栽培地域としての特色も殆ど見られないが、栽培農家に限って見れば、経営形態などに特色があり、反当収入が多く、まとまった収入が得られることから、農業所得に占める割合が比較的高く、主要作物のひとつとなっている場合が多い。しかし、価格の変動が激しく、不安定な作物であるため、薬用人参の単一経営ということはまず考えられない。また、現在の栽培農家の多くは栽培歴が長く、ある程度の伝統をもつ農家であり、最近になって栽培を始めたというような例は殆どない。

この地域では薬用人参栽培に伴い、薬用人参の加工も古くから行なわれ、農家の副業として発展してきた。加工の仕事は薬用人参収穫後の非常に短い間しか行なえないので、専業にすることはできないが、この時期がちょうど農閑期に当たるため、農家の副業としては手ごろな仕事といえる。しかし、現在では人参農協の力が大きく、また、栽培もそれほど盛んではないので、薬用人参加工業はあまり盛況をみなくなり、業者の数も激減してきている。

千葉県八街町の農業地理学的考察

高崎 祐子

本論文は首都圏における一畑作地域を取り上げ、そこに展開した農業について考察することを通して広く今日における農業の実態とその問題点を考えてみようとしたものである。

対象地域としての八街町は東京から約 50 Km の距離にあり、千葉県北部に広がる下総台地のほぼ中